

浄土一風772号（毎月1日発行）平成23年2月1日発行 昭和10年5月20日創刊（認可）

monthly JŌDO

2011

February

March

合併号



法然上人讃仰会

法然上人を歩く

二十五霊場二十五番

知恩院

◆御詠歌◆

草も木も
枯れたる野辺に
ただひとり
松のみ残る
彌陀の本願

このお歌は法然上人の弥陀本願の御詠歌です。「松のみ残る」の松とは、松の色は古今変わることもなしといわれ、他の殆どの樹木が葉を落とす冬の間も、常に青々とした葉を茂らせていることから、めでたいものの代表とされたのです。冬の本枯らしの吹きすさぶ中、全ての草木が枯れてしまった野辺に、松だけが常盤の緑を誇っている。それと同じように全ての教えが廃れてしまっても阿弥陀如来の本願の御教えだけは、いつまでも栄え続けるのです、という意味を詠まれています。



国宝 知恩院三門（写真：浄土宗文化局）

浄土

2011/2・3月号 目次

法華經を読む	真野龍海	2
会いたい人 柳家小満さん③	関 容子	8
法然上人をめぐる人々		
勢観房源智の入室（第八回）	石丸晶子	16
響流十方	袖山榮輝	26
法然上人を歩く		30
小説快僧 渡辺海旭	前田和男	34
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	47
編集後記		48

表紙裏・法然上人を歩く知恩院

背表紙裏・法然上人を歩く国宝法然上人行状絵図



2011年表紙 雲中供養菩薩（白金・戒法寺蔵）

仏師 鈴木禮次朗

表紙題字＝中村康隆前浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人八百年大遠忌
を迎えて

法華經
を

読む

元大正大学学長
法然上人讃仰会顧問

真野龍海

ここ数年来、法然上人の本年の「八百年大遠忌」に生きてお迎えできることを、同行、同信の方々と共に願うて参りましたが、愚僧、どうやら念願達成出来たこと、何よりも随喜の念に充ち満ちています。

それにしても、愚老、その間、大戦争に召されながらも、人間万事塞翁が馬の故事そのままに、先般無事米寿も越え、宗門功労にも与り、有り難い極みと感謝申しております。

さて、私共の所属する浄土宗は、所依の經典は『無量寿經』『観無量寿經』『阿弥陀經』の「浄土三部經」でありますが、傍らに拠よとするものに、『妙法蓮華經』が上げられています。法然上人も比叡山入山早々は、『法華經』を数年、研修されたのであります。

お芝居狂言に法門争いというものがありますが、旅先で、「法華經」の行者と、念仏者とが、法門争いをやりまして、めいめいが、「南無妙法蓮華經」が優れているんだ、いや、「南無阿弥陀仏」が優れているんだ、と、激しく言い争う中に、興奮してしまい、終わりに、念仏者も「南無妙法蓮華經」々々、法華行者も「南無阿弥陀仏」々々、と称えだし大混乱となる。いわば、「宗論はどちらが負けても釈迦の恥」ということが言われますように、それぞれに、宗派の特徴があるのですから、宗論の喧嘩は無意味ということをおもしろ可笑しく、お芝居して見せる一幕です。

「宗論はどちらが負けても釈迦の恥」という諺は、味わい深く銘記すべきでしょう。しかし、これは、ずっと過去のことでもう、現実には、各宗、小異を認めつつ、大同、一味平等の法界、大仏教に入る、というべきでしょう。

さて、私の関係する仏教綜合大学たる大正大学は、浄土宗・天台宗・真言宗の三宗から

出来ています。したがって、同じ屋根の下で、日々、共通的仏教は、肩を並べて聴講し、専門は、それぞれの講座で、その教師から受講するわけです。この所は天台宗さんは、どのように解釈されますか、というように気楽に声をかけて、すぐ、返事が戻ってきて、気兼ねが要らないのです。このような学科の合成・研究も珍しい、というより、世界無比の研究の場であり、どこにもない学修の場と言えます。

以前、浄土宗の研究会で、天台学の権威を招き一席の講義を聴きました。後の質問で、先生の幸福ってなんですか、と遠慮のない問いが出まして、ひやっとしましたが、すぐ、穏やかな「御念仏を称え浄土に往生するのが幸いと思っています」との御返事が返ってきたことが印象的でした。中には天台の「摩訶止観」？と思うご仁もいたかもしれない。その問答が、同僚とも言うべき教員同士で交わされたので、もつとも、と感じ入ったことがありました。

さて、幾たびか質問したりお願いしたりして納得することが多いです。ある時、お聞きもししていないのに、「法然上人は『法華経』を読んでおられましたのが、よく分かりますよ」と、私の顔をのぞき込んで言われた。その先生は現在大正大学学長の埴田孝文先生。私は、「どこにそのようなことが？」、というような愚問は発せず、多分、それは、『法華経』第二章の「方便品」の、とくに、『法華経』の教えを行じた人々幼児に至るまでが、それぞれに『法華経』の、というより、通仏教の修行なり功德を、一つ一つ積み重ね、その一つで必ず成仏すると説かれてある偈文（五言絶句の漢詩のようになっていて、散文のお経部分を、まとめる形となっているお経の部分）の所であります。これは幼児でも出来る、

手近な仏教の修行というより、行いやすい仏教の行いが、何十となく併説されている所なのです。

その具体的な仏教実践の方法が、この「方便品」の箇所には、次のように幾十となく列挙されているのです。

童子が戯れに砂を集めて仏塔を造る、仏のために色々な形像を作ったり、彫刻したり、或いは、色々な宝石で仏像を作ったりすれば、みんな、即、仏道を完成したことになる。鉛・木・錫・等々で彩色したりすれば、みんな、すでに、仏道を完成したことになる。乃至は、童子が戯れに、草木や筆、或いは、指の爪などで仏画を画けば、その人々は、だんだんに功德が積まれて、大悲の心が具わり、みんな、仏道を完成します。成仏できると、一つ一つ具体的に説いています。順不同に紹介しましょう。其の一、「歓喜の心で歌を歌って仏様のお徳を讃えたり、一つの小さな声で、南無南無と拝んでも無数の仏様を見て拝むことになる、心が散乱したままでも、一度でも、「南無仏」と称したら、もうすでに仏道を完成したことになります」というように、子達の簡単な仏様への御礼であっても、みんな、それは仏様の道を完成させていることになります。成仏の道ですよ、と、同じような表現で何度も何度も分かりやすく説いています。

また、今も皆さんがお寺で見かける楽器入りの法要のことも説かれています。

任意のいくつかを紹介いたしましょう。あの難しそうな『法華経』にも、このような教えが説かれているのか、とびつくりされる方も多いと思います。

さて、子供達は泥いじり、砂遊びが大好きですが、『法華経』は、それを次のように列

挙して、仏教を実践することになり、そうして、成仏じやうぶつするとまで言い切っているのです。

「もし曠野こうやの中に於いて、土を積み、仏廟（仏様方をお祀りする建物）と見立てたり、ないしは童子が戯れに砂を集めて、高く積み上げ、五重の塔のようなものを作って、仏さまの塔だと言っても、この子達は、みんな、すでに仏道を完成したのである。と、このように、それを以て「仏の道」を完成した者である、と説かれています。したがって、このお経文には、成仏々々という文字がずらりと並ぶのであります。成仏といえは、なんとなく浮世うきよ離れのした、また、難しいことと思いがちな私どもの心を、ひっくりがえしてしまふ、素敵な言葉を、いわば仏様ごっこみたいなことでも、「仏道を成ずる」と、説法されているのであります。

そこで皆様、この小さな仏様に対する動作や遊びで気づかれたことはありませんか。

そうです。日蓮上人の御命日ごめいにちにくり拡げられる、信者さん達の万幢会まんどうえといいますが、造花で四方八方に大きく飾った花飾りの棒とか、灯明をかざす人とか、上人を紙で作った御像の台とかを元氣よく唱名、お題目に合わせながら担いで行進されます。上人様御命日の追善の行列というのに、活気に満ち賑やかです。そこに、この『法華経』の「方便品」の偈文の一つ一つが展開されているとお思いませんか。

そこで申し上げたいことは、この一つ一つの仏様に対する遊びごとのように見える児童の、行いも、それぞれに、「成仏」という素晴らしい言葉が使われているのです。そこに、『法華経』に対する堅苦しい説明が一つもありません。

この一つ一つの分かりやすくかんたんな仏様に対する教えの数々は、容易に大衆、幼児

を、『法華経』の世界に、仏教の道に導き入れることでしょう。

『法華経』に対して、中身をよく理解しない人は、難解々々といって、喰わず嫌いに外ありません。

あの万灯会まんとうえといいますが、行列を初めて見て、私は痛感しました。単純明快でダイナミックなのです。小さい声ですが、愚生の記念日も十月十三日で、上人様の御命日と同じ。妙に因縁じみたものを感じます。

『妙法蓮華経』のお話を、いつかまた。

奉祝

法然上人鑽仰会会長（現在は顧問）を長く務められました東京教区芝組天光院前住職真野龍海師は、平成22年12月28日に大本山清浄華院第八十二世法主に就任されました。此処にご報告いたします。

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

大好きな文楽師匠が亡くなって、小満さんが次に師と仰いだのが小さん師匠だった。

「文楽師匠から謎かけられていたんですよ、あたしが死んだらお前、どうするんだい？つて。それで日を改めて、盛ちゃんもりの『道具屋』をしつかり聞いときなよ、楽屋からよく見ときなよ、つて。小さん師匠の本名は小林盛夫ですからね。ちゃんと方向づけをしてくれるたんです。小さん師匠は四代目小さんの弟子でしたけど、小三治だったころに四代目が亡くなって、それから文楽師匠の預り弟子という形になってました。師匠にもしものときは、尊敬する人は小さん師匠しかないと思つてましたけど、それをあたしの口から聞いときたかつたんでしよう」

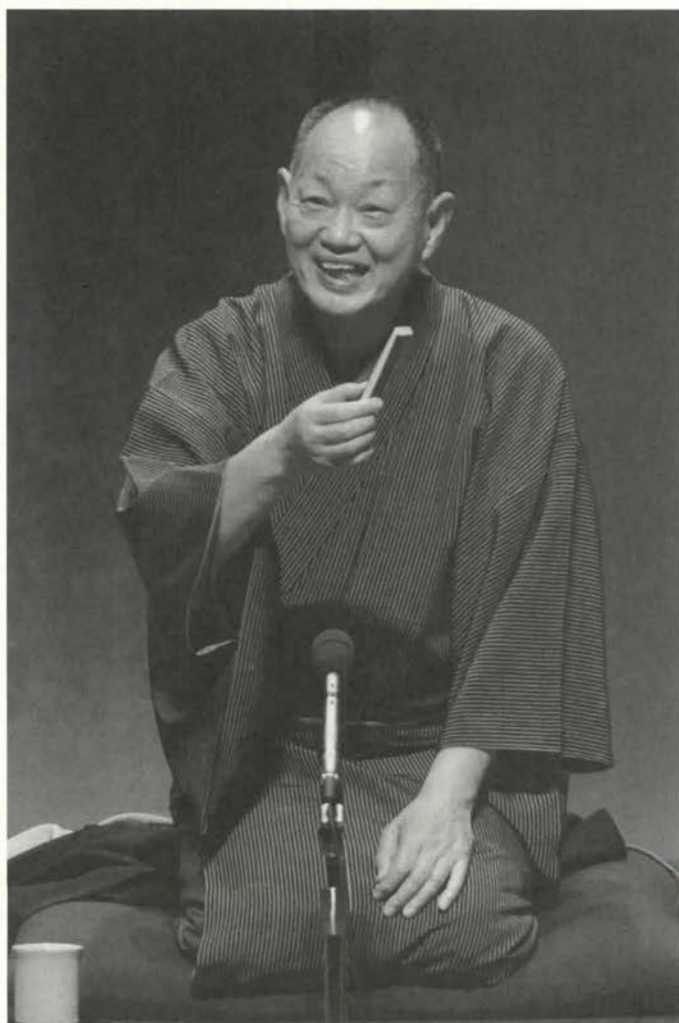
文楽師匠が亡くなったとき小満さんはまだ二ツ目になって三年くらい。桂小勇の時代だった。

「屋号を柳家にしましょうか、と伺つたら、いいよ、変えることはない、と言われて嬉し

かつたですよ。師匠に死なれて寂しいときでしたからね。小さん師匠つて方はあまりしゃべらないんですけど、物ごとをよくわかつて、深く考えてくれる人ですよ。そして決断が速い。江戸っ子ですよ。江戸っ子は考えて怒っちゃいけない。パツと怒つてコロツと忘れる、つていうんです。師匠が楽屋でハナをかんて、弟子がすかさず屑籠を差し出したら怒つて睨んで、もう一度かんだあとに怖る怖る差し出したらニツコリして、ありがとう、つて（笑）。また、ある色もののコンビが楽屋での態度が悪くてみんなにいやがられてたときに、師匠が見つけてね、お前たち、評判がよくないよ、少しずつ変つたんじゃダメだよ、ガラツと変えなくちゃいけないよ、つて」

小さん門下となつて三年目に、真打昇進の話が持ち上がった。

「移ったところは上がつかえてて、二十何人かいましたから当分回つてこないんじゃないかと思つてましたけど、落語協会の会長が圓生



研究熱心、練習熱心な小満さんの高座には色々な演目がかかる。

師匠からうちの師匠に変わった途端に、十人くらいずつ真打にするようになったんで、あたしにも番が回ってきました。名前をなんにするか、師匠が楽屋でいろいろ書いて考えてくれるんです。才賀はどうだとか、あたしの本名が栗原理^{つばき}なんで、文理はどうだとか。師匠、それじゃあ大学ですよ、ってね（笑）。そこへ小せん師匠が入ってきたら、あ、そうだ、お前の親父の名前があつたつけ。それが二代目柳家小満^{りゅうけい こまん}なんです。以前、その小満^{こまん}師匠が亡くなつて、お通夜に根岸のお宅へ伺つたときに表札を見て、いい名前だなあ、と思つたことがあります。それで喜んで三代目を襲名させていただくことになったんです」

平仮名で「小まん」とすると「ま」は「末^{すえ}」から来た字だし、万葉仮名の「ま」は「満^{まん}」だから縁起がいい、という氣に入り方が、いかにも学究派。

小満さんの結婚はまだ二ツ目のときだつ

た。今も奇数月の十三日にお江戸日本橋亭で開かれている「小満んの会」の受付で、いつもにこやかな光子夫人に出会えるが、二人が知り合つたのは小満^{こまん}さんが文楽門下のころ。

「かみさんは茅場町の薬品会社のＯしだったんですが、明るい性格なんでサツシの会社に引き抜かれたりしてるんです。そのころあたしがよく出かけてはたむろしてた上野の音楽喫茶のマスターが写真を撮るのが好きで、ある日、この子いいだろう、って写真を見せられました。あ、いいね、会いたいね、って、名刺に十円玉をテープで貼りつけて、これ渡して、って言った。向うもその十円玉をもらいっぱなしにはできないから電話をしてきましたよ。でも黒門町の師匠の家ですから、ハイ、ハイって、事務的な返事をして、それでも初デートにこぎつけました。会つたらやつぱり明るくて頭がよくて可愛らしい、いい子でね。当時からまん丸でした（笑）。今は

ますます丸くなつてますけど、かみさんが言うには、あたしが痩せててごらん、亭主の稼ぎが悪いから、つて言われるでしょう、つて、いつもこの調子でやられてます」

光子さんは第二回「小勇の会」からの常連客となり、結婚後はずっと受付を担当している。

「結婚が決まつて、小さん師匠のお宅に二人で挨拶に行きました。日曜日だったんで、ちょうど剣道の稽古日で、ヤットーという賑やかな掛け声が聞こえてました。そのとき玄関に出迎えてくれたのがあたしより二つ三つ年下の小団治君です。胴着をつけて、ピタリと両手について、あ、師匠もお待ちです、なんて言つて、じつにかつこいい。中央大学剣道部出身で、師匠と同じ、七段ですからね。かみさんなんかそれ見てうっとりしてましたよ。それで師匠にお目見えしたら、かみさんがいきなり、あの、女の弟子は取らないんでしょうか、つて訊いた。すると師匠が膝を乗

り出して、取りますよ、取りますとも、つて（笑）。そのあとはもう剣道の話ばかり。結局、子供ができるまで熱心に通つて、二段まで行きましたからね。あたしはやりませんでしたけど」

光子さんが言う。

「師匠のおかみさんにはずいぶんいろいろと教わりました。お稽古に伺うと、あとで喫茶店に行つてるよ、という合図があるんです。私たちの婚礼のとき、記念の寄せ書におかみさんが書いてくださった——そよ風がそつと柳を引き立たせ——という句は、なんて細やかで素敵なはなむけなんだろうと、今も私の座右の銘です」

小満んさんは小さん門下になって、何かにつけて文楽師匠との違いに戸惑うことがあった。

「前の師匠は御飯を大き目の茶碗に軽くよ、そののが好きでしたけど、小さん師匠にそのようにしてお給仕したら気に入らずに、めしは

こうやって盛るもんだ、って言われたりね。お酒でも、前の師匠は楽しそうに小首をかしげて手酌でチビリチビリ。もう一っつてれっつ、あと半てれっつ、つけておくれ、って調子でしたけど、小さん師匠は冷やのコップ酒で豪快な飲みっぷりでした。師匠が七十歳になったとき、何と思ったかバツと酒をやめましてね。楽屋で誰かがわけを訊いたら例のごとく怒って、やめたからやめたんだよ、って言うてました。それ見習ってあたしもやめようと思つて——衣がえ酒もそろそろ見切りどき——という句をこしらえてかみさんに見せたら、いつもは寝めないのに、あらお父さん、なんていい句なんでしょう、って乗せられてあたしも酒はピタリとやめました」

ある日、その噂を耳にした志ん朝さんから小満さんに電話があつた。

「酒やめたんだって？　って訊かれてびっくりしてね。どうだった？　別にどうつてもなかったです。そうか、やめるか、って眩

いて、翌日、昨日飲まなかったよ、って自慢の電話がありました。三日目、せっかく君に言ってもらったけどね、俺、突っ走ることにしたから……って。どうしてもやめられなかったんでしょう。肝臓がよくないのに、疲れがたまるとつい飲んじやう。悪循環なんですよ。しかし、酒やめないことをわざわざ断つてきて、つくづく律儀な人なんですなえ」

小満さんは、文楽師匠が志ん朝さんを高く評価していた場面をよく憶えている。

「二ツカウイスキーのお招きで、森繁久弥さんやら三木のり平さんやらがいらしてたんです。そのころ志ん朝さんは芝居に凝つてて、よくのり平さん演出の舞台に出たりしてました。その日、会場でうちの師匠がのり平さんのところへツカツカと寄つて行つて、手前どの志ん朝がお世話になつております、落語界にとつては百年に一人の男ですからそのおつもりでよろしくおねがい致します、って挨拶したんです。返してくれとは言いませんが、

今を去る20年前、湯島天神での小満んの会で、奥さま光子さん（右）と娘さん舞さん（左）と一緒に。



役者にしちゃってくれるな、ってことですね。のり平さんにもっこりうなずいて、わかってます、という顔をしてました。いい風景でしたねえ」

小満んさんが独自の世界を切り開く落語に對する意欲とその努力は、大変なものだと思う。既に三十数年のキャリアを持つ「小満んの会」の三演目のうち必ず一つは珍しい演目が入っていて、その資料調べ、台本の構成、何回も推敲を重ね、憶えて稽古してまた練り直して、ようやく高座にかけるまでになる。「会が近くなるとほとんど寝てないんじゃないかしら」と、おかみさんも傍で見えていて頭が下がるし、身体が心配、という。

ずっと以前に小満んの会で取り上げたオペラ『トス力』などは非常な力作だった。

「元はと言えば名人圓朝が、福地桜痴から聞いたフランスの舞台『ラ・トス力』の話に興味を惹かれて『名人比べ』として口演したも

のなんです。お膳立がじつにみごとで、画家のマリオ・カヴァラドッシが絵師^{（おのゝゑ）}、歌姫のトスカが踊りの師匠、お須賀さんというこ
とになってます。これをまだ元気なころの正岡子規が寄席で聞いてるんですね。日記にそうあります。圓朝が高座にかけたほうが、ブツチー二がオペラにするより十年早かったそうですから。『名人比べ』はのちに歌舞伎でも『錦の舞衣』として上演されたことがあるそうですよ」

と、ちよつと話を聞いてもすごい勉強家。近ごろでは寺の学問所に材を求めた『十八談林』、河竹黙阿弥の作と言われる『鰻沢^{（うなぎざわ）}パートⅡ』を復活するなど、小満んさんの意欲は止どまるところを知らない。

この一月十三日の第二四七回小満んの会は大入りで、疊敷きの客席に「お膝送り」をお願いするおかみさんの弾んだ声を聞いた。

仲入りには、小満んさん手描きの兎（今年^{（今年）}は卯年）のついた小さな羽子板や手拭をおか

みさんが、高座からプレゼントする。この配り方がユニークで、還暦の方は？ 私は美人、とは言いにくいでしょうけど、まあそこそこだと思う方は？ とおかみさんが訊いていき、該当すると思う人が照れながら手を上げる。最後に、では、今日最も遠くからいらっしゃったと思う方は？ と訊かれて、前のほうにいた男の人がすかさず「あの世から」と答え、会場の笑いや賞品を獲得した。

小満んの会通い何十年のベテラン客は、なかなか隅に置けない。（この項おわり）

※三月一日（火）19時開演 池袋・東京芸術劇場
小ホール2（囃小屋in池袋） 弥生の独り看板
柳家小満ん（雪月花） 3500円
小満ん師匠の雪月花に因んで囃三席です。
どうぞお出かけください。
問合せ3913-9027

シリーズV

法然上人を
めぐる人々

勢観房源智

◆第八回◆

の入室

石丸晶子

七

青蓮院に送りだされた智丸は、天台宗の僧侶となるべく慈円のもとで修行をはじめた。

早朝に起きて同朋とともに青蓮院の部屋々々を掃き清め、雑きんをかけ、庭を掃除する。そして清々しい空気のなかで師僧から法華經を学び、夕べには念仏を称えて一日が終った。

少しずつ智丸は寺の生活になれていった。

そしてやがて得度をしようという段階になった建久七年（一一九六）十一月の終り、思ひもかけぬ事件が外の世界から巻き起こって、智丸はふたたび法然上人のもとに送りかえされたのである。修行をはじめて一年余が経っていた。

思ひもかけぬその事件とは……

京都政界にクーデターが起きて、親幕府の摂政関白兼実がその地位を罷免されたのである。

これに伴い、後鳥羽天皇の妃で兼実の娘任子は宮中を追われ、実弟の慈円も天台座主の地位を追われた。きのうまで、鎌倉の支持をバックにときめいていた兼実一門が失脚したのであった。

きのうの友は今日の敵というが、政治の世界ほど混沌としていて第三者にわかりにくいところはない。兼実一門を支援して京都政界に鎌倉の威光を効かせていた頼朝であったが、長女大姫の入内問題が^{じゅだい}出来して、頼朝は兼実を支持することを止め、支援する相手を兼実のライバル源通親に鞍替えしたのである。頼朝と政子は、大姫を後鳥羽天皇のもとに入内させたいと願っていた。

それというのは、大姫は幼い日に許婚の少年木曾義高を父頼朝に殺された少女で、以来、その衝撃でノイローゼとなり、いちずに義高少年の^{おとこ}飾を慕い求めて館の奥深い一室にこもる娘になっていたのである。

義高の倅から大姫が心を逸らす道はないものか。

そのことが父として母としての頼朝夫妻の願いであった。そして二人はその方策として、大姫を天皇のもとに入内させることを思いついたのである。



妃になって鎌倉からは遠く離れた都で暮らすことになれば、大姫の気も晴れるのではないか。

義高のことを忘れることもできよう。

そう考えた頼朝夫妻にとって、娘の任子ですでに後鳥羽のもとに入内させている兼実は、しだいに邪魔な存在になってきたのであった。

兼実が京都政界の中枢にいて、任子を見送られては困るのである。

頼朝夫妻は娘大姫のために、何としても任子を宮中から追い払わねばならなかった。そのためには兼実を権力の座から引きずりおろさなければならぬのである。

ところで、いうまでもなく、頼朝夫妻のこの思惑は、兼実の政敵・源通親にとってはまさに渡りに船。大歓迎である。

かくして建久七年のクーデターは実行された。

兼実の九条家一門は失脚したのである。

そしてこのクーデターは、天台僧となるべく修行の日々を生きたはじめた十四歳の智丸の、その後の人生をも変えてしまった。彼はふたたび法然上人の許へ送りかえされてきたのである。

八

「智丸を見ると敦盛のことを思い出す」と訴えた直実が去ったあと、法然上人は立ちあがって障子をあげ、しばし冬枯れの外の景色を眺めておられた。

（智丸を守る最善の道は何であろう）

そう思案する法然上人の胸には、この夏、源氏の目をのがれて都にかくれ潜んでいた平知忠が、頼朝の妹婿の一条能保をねらい、かえって殺された事件のことがよみがえっていた。知忠は先の源平合戦のおり、

「見るべきほどの事は見つ。今は自害せん」

といつて壇ノ浦に沈んだ平知盛の子息で、いうまでもなく智丸の近い身内である。

このときも、四条河原のたもとに掛けられた知忠の首を見物しようと、大さわざで人びとが押しかけたという。

平家が滅んで十年余。しかし世の中はいまだに静まらず、殺気だっていた。

「真観房」

やがて法然上人は真観房ししかんぼう感西をお呼びになった。

このとき感西は四十四歳。法然上人の伝記によると、彼が上人のもとに入室したのは十九歳のときで、当時三十九歳の法然上人は黒谷におられる時代であった。

弟子に順番があるとすれば、感西は筆頭弟子法蓮房信空に次ぐ法然上人第二番目の高弟である。四十八歳で死去した彼は上人に随従すること三十年におよび、人柄は誠実真摯。非常な秀才であったと上人の伝記は伝えてい

る。

正治二年（1200）の春、彼が亡くなったとき、法然上人は

「わたしを置いて往ってしまわれるのか」と涙を落とされたという。

「お呼びでございませうか」

感西が膝をついて板戸をあけた。

「近う入られよ」

「お寒うございます」

障子が開け放たれたままであるのを見た感西は、立つて行つて障子を閉めようとした。

「いや、そのままでよい」

法然上人は制されると、

「今、そなたを呼んだのは、頼みたいことがおきたからだ」

「何なりとお命じくださいませ」

「青蓮院の慈円僧正のもとから吉水に戻ってきた智丸を、そなたに預けたいのだ」

「智丸をでございませうか」

「そうだ。彼はまだ十四歳で、一人前の僧侶となるよう、これからしっかりと教育せねばならぬ」

「仰せの通りでございます。しかし、わたくしは師僧の不肖の弟子。そのような大役がとまりましようか」

「そなたは、わたしの許に来てすでに二十余年のなる。そなた以外に、智丸を預けられる弟子はおらぬ」

「かしこまりました。不肖の身ではございますが、智丸のこと、たしかにおあずかりいたします」

感西の返事をきいて法然上人は、

「そなたも知るように、わたしは朝夕智丸一人に寄りそって起居をともにしてやることできぬ。しかし、智丸には今、彼に寄りそい朝夕起居をともにして教え導く師匠が必要なのだ。智丸を護ってやる師匠が必要なのだ」

「承知いたしました」

感西は答えた。

「実はこのことはわたしと法蓮房、そして慈円僧正の三人だけが知っていることなのだが」

「といって上人は、智丸が平家嫡流の一人であること、このことを踏まえて智丸を守ってやらねばならないことを話された。」

「師僧のおことば、わたくし感西、肝に銘じ、いのちに代えて智丸をお預かりいたします」合掌して感西はいった。

その日から智丸は、法然上人と一つ屋根の下に起居しつつも、感西を直接の師匠としてその指導をうけることになった。

「よい、智丸。そなたは今日からわたしとともに阿弥陀如来への旅に出るのだ」

はじめて師弟としてむかいあったその日、そう感西は智丸にいった。

「そなたのことはお上人様からうかがって

る。平家ご一門の菩提を弔うために、そなたは如来が遣わされた申し子なのであらう。そしてわたしも、今日からそなたとともに、ご一門の冥福を祈る旅に出よと、如来から召し出された」

すでに約一年、慈円のもとで修行をしていた智丸が得度をゆるされたのは、その年が明けて十五歳になった初夏であった。法然上人の幼名勢至丸の「勢」の一字、そして師匠真観房の「観」の一字を与えられて、彼は出家名を勢観房源智と名乗り、いよいよ僧侶としての生涯を生きていくことになった。

九

四年の月日が流れた。

この間、感西はつねに源智に寄りそい導き、源智もまた感西のそばをかたときも離れなかった。

正治二年（1200）の一月が終り、暦は

二月になっていた。

感西四十八歳。源智は十八歳を迎えていたが、暮れから引いた風邪をこじらせて病床に臥す感西は、その数日来、危険な状態がつづいていた。

「お師匠様」

それまで瞑^{つぶ}っていた目を感西が微かにひらいたのをみて、源智がよびかけた。

「薬湯をもつてまいります」

「いや」

微かな声で感西はいった。

「そなた、ここに居ったのか」

「はい」

すると、感西はつぶやくように、

「そなたと念称している夢を見ていた」

「……」

夕べの光りが射して、庭木の影が障子に映っている。しんとしたひとときが流れていった。

しばらくして感西はいった

「大きくなって。幾つになった」

「十八にございます」

「そうであったな。立派な僧になった」

仄かに微笑して感西は目を閉じた。

と、

「勢観房」

源智に呼びかけた。

「そなたに言い置くことがある」

「お師匠様、元気をお出しく下さいませ。お

師匠様」

源智は感西が掛けている薄い布団にとりす

がった。

涙が源智の頬をつたわっていった。

その源智の呼びかけには答えず感西は、

「そなた、仏の教えでは殺生は禁じられている。さすれば、浄土には魚食をしないものが往くのであろうか。魚食するものが往くのであろうか」

「……」

「どう思う」

重ねて感西はたずねた。

「魚食をしないものが浄土に往くと思います」

源智の答えに、瞳をとじたまま感西は微笑した。

「いかにもそう思うであろう。わたしもかつてはそう思っていた。しかしある日、われらの師僧法然上人はいわれたのだ」

感西は目をひらいて、涙を頬につたわらせながら一心に師のことばを聞こうとしている源智をみつめた。

「魚を食べないものが浄土に往生するのであれば、猿こそが往生しよう。また魚を食べるものが往生するのであれば鵜飼いの鵜こそが往生しよう。食う食わぬによらず、ただ念仏するものこそが往生すると源空は知っている。そう師僧はお教えになった」



そういうと感西は目を閉じた。

「われらはみな、罪深い者なのだ。殺生をし
たくなくても海辺の漁師は魚を捕らずには生
計がたたぬ。魚食せずには生きていけまい。
山家に住む猟師とて同じことなのだ。われら
が殺生せずにすんでいるのは、たまたま海辺
の漁師、山家の猟師でなかっただけにすぎぬ」
「……」

「師僧のおことばの意味の深さよ」

法然上人のみ言葉にこもる深い意味を味わ
い求めているかのように、目をとじたまま
感西はいった。

「このみ教えこそが、信仰の核心なのだ。こ
のみ教えをそなたに送りたい」

いつしか源智は姿勢をただし、合掌して感
西のことばをきいていた。

「さらに一つ」

感西はいった。

「これは以前そなたにも申し伝えた師僧のみ

教えだが、この世を生きていくのは、という
み教えがあった。あのみ教えを忘れてはなら
ぬ。今、わたしがそなたに送るこの二つのみ
教えのころは、いうまでもなく一つである。
このみ教えに生きよ」

合掌しつつ源智はすすり泣いた。

そのみ教えを、源智は泣きながら心によ
みがえらせていた。

（この世を生きていくには、念仏が称えられ
るように生きていきなさい。念仏の妨げにな
るものは何であれこれを厭い捨て、念仏だけ
を大切になさい。

もし独身でいて称えられないならば、妻を
娶り、妻がいて邪魔になるようならば、独身
でいなさい。自分の住まいで称えられないな
らば他所へ流行し、流行して駄目ならば自分
の住まいにこもり、貧しくて称えがたいなら
ば他人の扶持をうけ、…一人では称えがたい
ならば大勢して称えなさい……）

「泣くのはやめよ」

静かに感西はいった。

「わたしは浄土に往くのだ。そなたはよろこ
ばねばならぬ」

「お師匠様」

「わたしが浄土へ往ったあとは、法然上人が
そなたの師僧となつてくだされよう。しっか
りお仕えるのだ。よいな」

目をあげて源智をみつめると、感西は手を
差し伸べてしゃくりあげている源智の手を静
かに握った。

翌日、吉水の草庵に起居する法然上人とお
弟子たちが見守る中、感西は浄土へ旅立つて
いった。静かな最期であった。

「わたしを置いて往ってしまったわねのか」。
このとき、法然上人がそういつて悲しまれた
ことはすでに記した。

もし我れ仏を得たらんに、国中の菩薩、金剛那羅延身を得ずんば、
正覺を取らじ。

【無量寿經】第二十六那羅延身願

私が仏となる以上、「私の」国土の菩薩たちが、金剛力士のように「強靱で健康
な」身体を得られるようにしよう。「万が一にも」それができないようであれば、
「その間」私は仏となるわけにはいかない。

ぴゅんぴゅんと跳ね

犬ならば愛犬、猫であれば愛猫。ウサギの場合は何というのだろうか。

昨年の四月のことだ。妻が突然、小鳥を飼いたいと言いだした。何かと苦勞が多い妻。多少なりとも癒しになればと、妻と末娘を連れ、早速、ペットショップに行ってみた。ところが意外と小鳥が少ない。何店か覗くうち、なんだか話が大きくなって、結局、小鳥とウサギを求めることになった。以来、我が家の居間にはウサギがいる。この一月で一才になった小型の女の子だ。

じつは我が家では長年、カメを飼っている。いわゆる草ガメだ。カメは比較的飼いやすい。タライの中に適量の水を張り、甲羅干し用に大きめの石を置いてやる。そして、欲しそうな顔つきの時、市販のカメ用の餌をやる。

暑さ寒さも気にならない。暑ければ活動的になるし、寒くなれば冬眠の態勢に入る。十一月上旬ともなれば自然と運動量が落ち、餌も食べなくなる。頃合いを見て、庭に穴を掘って埋けてやり、冬眠させてる。四月、我が信州の雪解けのころ、土から取り出し、再びタライに入れる。そうして、四十年近くを我が家で過ごしている。婿養子歴二十五年の私よりはるかに先輩だ。

一方、ウサギを飼うのは初めてだ。ケージに入れ、居間で飼うことにしたのだが、これが思いの外、暑さ寒さにデリケート。

寒ければ寒いで室温を上げ、夜、部屋の暖房を切った後は、ケージにヒーターを入れ毛布を掛けてやる。ヒーターをつけ忘れると、翌日には鼻水を垂らし、くしゃみをする。お腹を壊すこともある。暑ければ暑いで、温度計・湿度計とにらめっこしながらエアコンを調整する。風通しのいい日陰でいいかと思っていたが、去年の夏の暑さ、早々に体調を崩した。人間よりデリケートだ。

野生のウサギなら、過ごしやすい場所を求めて自然の中を探し回るのだろうが、飼う以上は、飼い主がそうした環境を整えてやるしかない。カメを土の中に冬眠させるのも、冬の間、そこがカメにとって快適な環境だと思うからだ。

『阿弥陀経』によれば、阿弥陀仏のまします極楽世界は「もろもろの苦あることなく、ただもろもろの楽のみを受く」という。私はこの苦と楽を、仏道を歩みにくくする要素、仏道を歩みやすくする要素と解釈しているが、『無量寿経』はそうした極楽世界の一端を「暑からず寒からず常に快適で心地よい」と叙述する。

仏教が誕生したインドは灼熱の地である。その一方で地域や季節によっては、朝晩、ぐっと気温が下がる。インドの暑さ寒さは生命の危機に直結しかねない。仏道を歩むにしろ、正直、暑さ寒さから身を守るのが先だろう。体を壊してし

まえば、元も子もないと思うのだ。

「暑からず寒からず」。せっかく極楽に迎え入れても、風邪をひかせたり、暑さにバテさせては仏道を歩ませるどころじゃない。つねに万全の体調で、心地よく仏道に邁進してもらいたい。それが阿弥陀さまの御心、心遣いなのである。

極楽の住人の体調を慮る。おもんばかるその最たるものが四十八願中の第二十七那羅延身願であろう。那羅延とは金剛力士のこと。インド神話に登場する神に因む名で、仁王さまのイメージであろうか。極楽に往生すれば、精力みなぎり、どんな病にも罹らず、何一つ怪我をする事もなく、体力が衰えることもない、何の煩いもないまま仏道に精進できるのだ。

我が家の居間にウサギを放つと、たまにピョンと跳ね上がる時がある。気分も体も絶好調、上機嫌のサインであるそうだ。

卯年の今年、小生、かれこれウン回目の年男。持病はあるが体力はない。体も痛い。そんな私でも極楽往生すれば、「おつ、絶好調」となるのだろうか。その暁には、ピョンとひと跳ねしてやろうと思う。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

法然上人を歩く

二十五霊場二十五番

高橋良和著 『法然上人紀行』 (探究社) より抜粋

知恩院

法然の足をとどめたところでは、比叡山の西塔青竜寺は十八歳から四十三歳までの二十五年であるから、いちばん長い月日であるが、その次に長いのは東山吉水の庵室と、大谷の禪房である。比叡山からくだって西山広谷での数年間、それに黒谷の白河の禪房、加茂の河原屋といわれる百萬遍知恩寺、四国配流と勝尾寺の四力年余の歲月などのほかは、この吉水の庵室と大

谷の禪房での住居であるから、やはり二十年ぐらいは東山一円に住んだといえる。

そのうち法然は今の円山公園の東奥の安養寺かその庵室であったというが、華頂山知恩院はこの吉水の庵室がその起源である。知恩院史には、

元々吉水の地は、背に華頂の翠巒を負い、平安京を

一眸に収めて遙かに西山を望む。大悲伝普化には好適の場所なので、上人は暫住兼帯の地も多かったが、独り当山のみは多年永住の本拠と定められた。当時の吉水の庵室は、西山広谷の庵室を移せるもので中ノ房または二つ岩の禅房ともいう、今の御影堂の地に当って在り、東の新房または松下禅房という、今の三門の東北、西の新房または清水禅房ともいい、今の三門の西南の地の三カ所にあったが、上人は専ら中ノ房に住し、東西の二房は門弟たちの宿舎にあてられていた。

とある。

すると吉水の地というのは安養寺なのか、今の御影堂のあるあたりなのか、容易に決定しかねる問題である。

この吉水の庵室は法然が四国に配流されて赴くまでであって、四国からかえってきて、勝尾寺に逗留の後住んだ東山の住居は、大谷の禅房であって、青蓮院の門跡である慈鎮が法然のために大谷の山上、南禅院という房舎を提供したことになっているが、法然の住居は華頂山では二つの地域といっても、あまり離れてい

ない二つの住居があったことになっている。

華頂山由緒図本記では、

抑此地は慈鎮和尚寄附練若開祖大師往生靈場也、当初大師御住房之跡東西三丈余北十丈許也、中古御影堂建てられしは即旧跡而今勢至堂之辺を其処也。

とある。すると法然の住居は四国から京都にかえってきたときには、かなり荒廃していたので慈鎮が自分の住職している青蓮院の住房を提供したのであるが、法然はここにわずか一年余り住んでいて示寂している。

このころはこの華頂山のあたりはいわゆる大谷という谷のあったところで、今そのささやかな流れの大谷川が、華頂山の鐘樓の左の溪谷を流れているのが名残りである。知恩院の建設のときに大谷が埋められたのであろうと思われる。

今日の知恩院の基礎をつくったのは法然の弟子の勢観房源智であって、大谷禅房が嘉禄三年（一二二七）の法難の際に破壊され、法然の遺骸を鴨川に流そうと

いうとき、その遺骸を嵯峨に、更に太秦に、そして栗生野において荼毘したので、この旧房は無惨なすがたになっていた。

この復興を計画したのが源智であって、まず栗生野で火葬にした法然の遺骨をここに安置し、同信の人々と力を併せ、ささやかながらにも仏堂を建てたことが今日の知恩院のはじまりであり、文禄元年（二五九二）にこの復興をやりあげ、法然の二十三回忌の際に四条天皇からは、仏殿に大谷寺、法然の廟所の勢至堂に知恩教院、三門に華頂山の勅額をおくられている。

然し当時の知恩院は、今日のような大なる地域に大殿堂があったわけではなく、おそらくその廟と勢至堂あたりに限られていたようであって、完備された大殿がつくられたのはいわゆる徳川初期の二代將軍秀忠、三代將軍家光の代であるといえる。

源智が法然の廟所を復興し、そのあと念仏門の興隆に力をつくしたものの、なお念仏門に対する迫害はつづいたようであり、一方において文明年間（一四六九—一四八七）の造営後、永正十四年（一五一七）に三

度目の出火となり、その後興についても東福寺の萬壽寺の建物を移し、また阿弥陀堂を建てて一応寺觀を整えたようであった。

そして織田、豊臣両氏の時代には加祿のことがあり、多少知恩院の面目は保たれたのであるが、本格的な知恩院の建設は徳川幕府になってからで、第二十五世の超誓在牛という住職が、三河の松平家の出身ということから徳川家康は知恩院を支援するようになったのである。松平家といえは徳川家の祖先であり、家康もその点で知恩院の大檀越として庇護したので、当時寺領七百三十石余の寄進をうけている。

たまたま家康の生母伝通院が慶長七年八月（一六〇三）に伏見城で死去したことに、知恩院で葬儀を行い、これを機会に寺域の拡張をはかり、現在の雪香殿のあたりにあった常在光院という寺や、太子堂、それに親鸞の墓などを他所に移して、大殿堂の建設計画をたてたのである。

この計画は慶長八年（一六〇三）であって、征夷大將軍の命令一下、大殿堂の建設がはじまったのであり、如何に幕府の勢力が強かったかが想像される。まず大

谷の溪谷を地馴して東山々麓を上、中、下の三つの段に区切った。昔の松下、二つ岩、清水という三つの禪房のあたりを上、中、下としたのかもしいないが、現在の建物にあてはめてみると、山麓にいちばん近い勢至堂、そして大殿といわれる御影堂、そして三門の三つの地域である。この地域の広さは中段の大殿のあたりが広く、山麓の勢至堂が比較的狭くなっているのは今日のようにとあまり変りがない。

その当時建てた堂宇がどのような大きさで、どのような建物があったかは資料が焼けているのでわからない。その当時の建物で今なお残っているのは三門と、経蔵がある。その建築は二代將軍秀忠であつて、当時は大殿、方丈、庫裡、阿弥陀堂、勢至堂、三門、経蔵などがあつたことが良正院文書（山内寺院）、華頂山由緒系図本記に記しているが、今日のようなあの大殿でなかったことはわかるのである。然しこの慶長の大造営によつて、法然の滅後、源智が念仏門を支えていた当時とは、まるでその想像も出来ないほど整備されたのである。この慶長の造営が終つて三十一年すぎた寛永十年正月九日（一六三三）に知恩院はまたまた炎

上したのである。

この時の住職は雄誉靈巖であり、第三十二代の住職である。当時の語り草に、この靈巖の豪快さというのか、企画性のうまさというのか、そういった点を物語る話がある。

この靈巖が、念仏の総本山としての知恩院の堂宇はなお貧弱であるので、なんとか建てなおしたいと考え、執事長の宗杷と相談の上、自分が江戸に赴くから、逢坂山を越えたときに、この堂宇に火を放つよう命じたといわれる。それを言い残して出発した靈巖が天津に入つたころ、知恩院の諸堂が全焼した知らせをうけたというのである。

普通ならすぐ返して、全焼した諸堂を調査して対策をたてる筈のところ、すでに計画をもっている靈巖は、そのまま東上し、江戸城に赴いて三代將軍家光に、只今総本山知恩院の諸堂が全焼いたしましたと報告したので、家光は祖父家康以来の一門の菩提寺であるので、直ちに復興を命じたということである。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十一回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

食と酒は欧州の十字路、ストラスブルクにあり



「食」で夏目漱石と

明暗を分けた留学生生活

異国にある異邦の人を大いに悩ませるのが「食」だ。裏を返せば、異国の食に馴染んでこそ異国の文化を消化して滋養にもできる。国を開いて五十年たらずの時代にあつては、日本人留学生たちが異国の食に戸惑うのは当然だった。渡辺海旭も当初は悩んだ。

ドイツへ渡って二年をすぎた頃、日本の友人からこんな手紙がとどいた。海旭に遅れること半年後に海旭と同じ欧州航路で横浜を発し、ロンドンの大学に留学した東京帝国大学の英語教師が、予定を早めて二年で帰国、食事が口にあわず、神経衰弱になったかららしい、聞くところではドイツは英国よりも食事がまずいそうだから、渡辺、お前は大丈夫かと海旭の留学生生活を案じる内容だった。

後にこれも友人からの私信で知らされたが、この英語教師とは夏目金之助という人物

で漱石なる筆名で「吾輩は猫である」という小説を発表、一躍有名な文化人になったと知らされた。

さらに手紙では、この夏目金之助はロンドン留学時、食えるものがなくて、薄暗い部屋で昼食がわりにビスケットを齧って餓えをしのいでいたらしいともあった。

この情報を海旭が留学仲間にしたところ、フランスの友人は「たしかにイギリスの食事はまずい。繊細な知識人ほど、耐えられなくて神経をやられたのかもしれない」と言うのに、ケンブリッジからストラスブルク大学に招聘されたロスマン教授を慕ってやってきたイギリス人留学生は、「なにを言うか。わが英国の食事はドイツほどまずくはない。それに、ビスケットを昼食がわりに食すのは、上流階層の作法。その日本人留学生はなかなかの知的洒落者だ。神経耗弱になったのは別の理由だろう」。

これにロシアからの留学生が割って入った。

「イギリスもドイツも料理のまずさでは、いい勝負だが、そのロンドンの日本人留学生が神経をやられたのは食事がまずいのうまいの、東洋と西洋の食文化の違いのせいではなからう。その証拠に、われらがワタナベはどうだ。最初こそ口にあわぬ料理もあるとか言っていたが、いまではすっかり、われら外国人よりもよほどドイツの食事を楽しんでいるではないか」。

そのとおりで、海旭は漱石とはちがつて、ドイツの食にすっかり馴染んでいた。十三歳で得度して寺に小僧として入り、さらに宗門の学寮で寄宿舎生活をおくるようになってからは、ゴマだのミソだの麩だのの精進潔斎の料理の日々で、海旭の腹は肉食に惹かれていた。すでにふれたように後に新戒律主義の旗手となる海旭だが、女性性は遠ざけたが、生涯肉食を好んだ。弟子たちが野菜を勧めてもよほどのことがないかぎり箸をつけないほどの肉好きで、それが寿命を縮めたとも言われて

いる。しかし留学時代の海旭はたんなる肉好きでドイツの食に馴染んだのではない。幼少期からの知的好奇心が大いに手伝って、食に対しても学究思索の姿勢を忘れなかった。

食をめぐる議論は、国籍が違う学友たちにとって、交歓のきっかけであると同時に、論をきわめてみるとなかなか奥深いものがある。海旭たちも、折に触れては、食談義を大いに戦わせた。そのなかでも海旭の言説は独創的で、留学仲間を啓発してやまなかった。

たいがい集中砲火を浴びるのはドイツであった。海外からの留学生が十人集まれば十人の評価は、「ドイツの食はよくいって質実」「直截に言えば貧しい」とりわけ「料理は文化なり」の自負をもつフランス人のそれは厳しかった。いわく「ドイツ料理で創意が認められるのは、せいぜいソーセージぐらいだ。ドイツ人ときたら、じゃがいもとソーセージさえあれば満足というのだから、人生の重要な喜びを知らず、気の毒なかりだ」。

しかし、海旭はそんな周囲の「ドイツ人は腸詰喰いの田舎者の堅物」という評価を逆転させて、留学生仲間の目をさまさせた。それは、仲間で誘いあって、南独の古都、ニュルンベルクに遊んだときだった。黒ビールとともに名物の焼きソーセージを食したところ、学友たちは、口々に、「いやあ、こいつは、ストラスブルクやベルリンのよりもはるかにうまい」と言い合い、ソーセージ談義に火がついた。フランス人がいつもの持論で口火を切った。

「本来なら捨てられてしまう豚の肉を同じく捨てられる運命にある腸につめこむ。これぞ究極の廃物利用で質素の権化だ。まさにソーセージほど質実なるドイツの国民性を代表しているものはなからう。したがって田舎風味のこの黒い麦酒にもよくあう」

誉めているようにでいて実は見下している評価に、海旭が敢然とこう切り返した。

「諸君は、ソーセージを単にドイツの素朴さ

の象徴とのみ評価しているようだが、その理解・評価はすこぶる浅いぞ。なるほど生々しくとぐろをまいていて不気味で、見た目はうるわしくない、味付けも塩とコシヨウだけで単純かもしれぬ。しかし、あまりに皮相にとられすぎてはいないか。いまここでこうして味わっているソーセージには、禅の精神が宿っている」

禅とソーセージがいったいどこでどうつながるのか、まさに禅問答で、一同は不意を襲われて息を飲んだ。

すでに当時のヨーロッパでは、禅は一部知識人のあいだで関心と呼んでおり、ましてや比較宗教学を学ぶ若き研究仲間にとって「ZEN」は新しい知的刺激剤であった。それは、後に海旭とも親交を結ぶことになる鈴木大拙が海旭よりも四年前に渡米、英語で禅の紹介を精力的に行ったことによる成果だった。

実は、海旭は「禅味」に加えて「俳味」を発見したと言いたかった。つまり「わびさび

の境地」である。ニルンベルクは日本ならさしずめ奈良にあたるババリアの古都、古風な教会群は斑鳩の古寺を思わせた。その傍にあるこれまた中世風たずまいの居酒屋で地のソーセージをつまみに地の黒ビールを傾けたとき、勃然として同時代の俳句の革新者、正岡子規の「柿食えば鐘なるなり法隆寺」の句が心中に浮んだのである。

しかし、これを西欧の学友たちに伝えるのはむずかしい。柿は日本人の心象風景の象徴的な原点だが、ドイツはもちろんヨーロッパで柿は馴染みが薄い。そこで海旭は、どうたとえたらいいか内心で思案したすえに、ドイツの庶民に広く親しまれている、ともにニルンベルクゆかりの詩人と画家の名を引き合いに出して、こう補足をした。

「ハンス・ザックスとアルブレヒト・デュラーの時代の人になったような興趣がわいてきて、自動車や汽車の文明の喧騒とせわしなさを忘れさせてくれる。したがって、僕はこ

のソーセージを野卑な田舎の味ではなく、枯れた味わい、すなわち東洋の禅の精神にも通じると感得した次第だ。どうだね、諸君」

仲間の顔に知の輝きが射した。とりわけドイツ人がふーっとため息をついて言った。「ワタナベ、よくぞ言ってくれた、さすがは宗教学の泰斗、ロスマン先生の一弟子だ」以来、仲間のうちでは、ソーセージを食するときは「さて、禅の味をいただくとするか」が身内用語（ジャーゴン）となった。

海旭に料理観の 転換をせまった「コシヨウウさぎ」

さらに食談義が海旭自身の宗教的知見を深めることにつながったドイツ料理がある。それはハーゼンベツファー、日本語に直訳すると「コシヨウウさぎ」である。これに出くわしたとき、世の中にはこのような恐ろしい食い物があるのかと海旭は吃驚した。おそらく、東洋人のくせに、そして僧職のくせに肉食を

好む海旭の覚悟のほどを瀬踏みしてやろうという魂胆もあって、ドイツの友人が、海旭を自宅に招いて、供してくれたのであろう。

そもそもコシヨウウさぎとはこんな料理

だ。肉屋で皮を剥かれたうさぎを買ってきて、自宅のペランダで物干しにでも二週間つるしておく。たちまち腐敗臭を発して蠅などがたかるが、お構いなしに、肉が黒くなるのを待って、これを骨つきのままぶつぎりにし、赤ワインとバターで煎る。ここで臭い消しのために大量のコシヨウをふりかけるのだが、それでも悪臭がいくらか薄まるだけで消えるわけではない。鼻がもげそうになるが、赤黒いどろどろの汁の中にうさぎ肉のぶつぎりが入っているという代物なので、目もそむけなくなる。

血の腸詰もかなり醜悪だが、コシヨウウさぎはその比ではない。これを平然と食らうことが出来る日本人なぞまずいまいだらうに、海旭の食欲と知的好奇心はこれをものともし

なかった。ペろりと平らげただけでなく、塩辛に似ていて乙な味でけっこういけると言っているのけ、留学生ばかりか、地元のドイツ人学生たちを唾然とさせた。

彼らをいっそう驚かせたのは、食事さえも学究思索の糧とするという海旭の姿勢だった。海旭によれば、インドの古い経典では、「あらまほしき至上の食」とはこう記されているという。

いわく、必ず色と香りと味が調和していなければならぬ。高尚にして芸術の域にまで昇華したものであればこそ、実益にも資する。牛乳で炊いた米粥である「乳糜」は色も香りも味も調和しているからこそ、これを食せば美容、精力、寿命、快楽、弁舌の五つもの実益がついてくるのだと。

ではドイツのコシヨウウさぎはどうか？ 第一の「色」は瓦礫をぶちこんだどぶ泥、第二の「香り」は腐ったチーズ、そして第三の「味」はといえば塩辛で、仏典の定義にのっ

とれば、下の下となる。ところが、今食してみ、独特の風味があつてうまい。となると、このコショウうさぎで、食の定義については「宗旨替え」を考えなければならぬとまで海旭は断じたのである。

上戸は友を得て知見を広げる

さて、「食」はこれぐらいにして、食事の友、酒について語ることにしよう。

後に、キリスト者の賀川豊彦らと組んで、禁酒・禁煙運動の旗振り役の一人に名をつらねる渡辺海旭だが、ドイツ留学時代は大いに飲んだ。飲むことで人の輪を広げ、知見を広げた。おかげで宗教学という狭い専門分野を超え、また大学をも超えて、さまざまな人種・民族の多くの人々と交わった。その中には、海旭が帰国後に興す社会共済事業にヒントをくれた社会活動家や、文章家・思想家として知的素養にみがきをかけてくれた芸術家たちもいた。その中でも酒がつくってくれた

生涯の友が、海旭より一年前に東京帝国大学から留学してきた解剖学者の足立文太郎であった。

ある日、同じ下宿で、二人はいつものように酒を酌み交わしながら、肴は夏目漱石の留学話となった。学部は違つていても漱石とは同じ東京帝大に籍をおき、ともに三十台半ばと年齢も近かつたこともあり、関心があつたようだ。足立は医学者らしく、こんな診立てをしてみせた。

「渡辺くん、夏目さんは、下戸ということだ。もし酒が飲めていたら、ひとりで下宿に引きこもつて神経をいためることもなかったのではないか。ロンドンにはパブという酒場が庶民の憩いの場、社交の場になっている。ここストラスブルクのカフェのようなものだ。酒が飲めたらそこで友を得て、議論をし、知見を広めながら気を晴らすこともできたろうに。ビスケットや落花生の砂糖まぶしが好きだったらしいが、酒が飲めないからそれにす

がったのではないか。奥方にも食べはじめると、やめられなくなりつい食べすぎてしまうと、整腸薬のカルルス塩が手放せない、と訴えていたらしい。げに下戸は胃にも悪いが心にも悪い。お互い上戸であることに感謝してもう一杯傾けようではないか」

留学前、海旭はドイツの酒といえばビールとばかり思っていたが、ここアルザス地方はつい三十年前までフランス領だったこともあり、ビールもうまいがワインもうまい。

留学して一年、また一年とたつうちに、海旭は、ビールもワインも季節の移ろいを感じさせ、海旭と足立たちの留学生活にメリハリとリズムを与えてくれることに気づくようになった。

海旭を毎年元気づけてくれるのは、ドイツでもっとも美しく爽やかな季節である五月と、その頃にふるまわれる五月酒（マイボウレ）だった。軽い白ワインに砂糖を加え、ヴァルトマイスターという日本の防風に似た可憐な

野草を、強い香りを発する開花直前につんで、ひたす。日本や中国では桃の酒に悪鬼を払う効能があると信じられているが、これと似て、五月酒は魔女ののろいや悪魔の害を避けることができるとして家庭でふるまわれてきた。また街では人々はカフェなどでこれを酌み交わしてのんびりと過ごす。そこへ近年はメーデーという労働者の示威運動や演説会が盛んになり、五月は新旧ふたつの文化・社会現象が交錯するようになった。この伝統と革新の交錯がドイツ帝国の「西の窓」であるストラスブルクの活況を示しているように海旭には思えた。海旭はデモに参加する仲間を尻目に、もっぱら学生の割引特権を行使してオペラへ出かけた。この時期の必見は、ワグナーの「タンホイザー」だ。ぞんぶんに堪能してオペラ座を出ると、外は劇中歌の「五月の歌」そのままに、木々の新緑が目にし、野には草花が繚乱を競い合い、芳しい匂いを放っている。

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話 (03) 38421289
振替 001801245231

そして熱い夏をビールでやりすごして、秋ともなると新酒（ホイリゲ）が出まわる。まだ発酵中のできたてのワインで、さしずめ日本のどぶろくだろうか。ちょうど栗が旬（はつもの）で、焼栗を肴にぶつぶつと泡をたてる新酒をやる。これぞ秋のストラスブルクの風物詩だ。

まだ雑味があり、野趣あふれていて、香りもいいが、飲みすぎると雑味がわざわいするのか宿酔いになるが、これも「うまいからといって度をこすな」の戒めなのだろう。都会でも有名レストランが「新酒あります」の看板を掲げるが、やはり田舎の居酒屋がよい。この時分の南独は、しとしと雨がふるなか、木の葉がはらはらと散りはじめる。この物寂

しい時節に、田舎の居酒屋で囲炉裏に櫓（ほだ）を投げ入れ暖をとりながら、栗と新酒を楽しんでいると、遠い日本の秋の長雨をしんみりと偲ぶことができる。

漱石はわずか二年で我慢できずに予定をくりあげて帰国をしたが、海旭は同じ留学二年めで、ドイツでも日本を思い出しながら異邦の友たちと交歓できることを知った。おかげで漱石とはちがって、十年はここにいてもいい。いやそれ以上でも、そんなふうに思えるようになっていた。それは、ひとつにはヨーロッパの十字路であるここストラスブルクの「食と酒」のおかげなのかもしれない。（つづく）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。



浄土誌上句会

● 遠

〔特選〕 仲人は遠縁の叔母梅二輪

井村 善也

わざわざ遠縁のというのだから、普段は疎遠にしているのだろう。あるいは親戚ということも知らなかったのかも知れない。仲人というので、はじめて遠縁に当たることを知ったと見るのが面白からう。

〔佳作〕 初夢やつくづく遠き父の家

村田 篠

遠縁のなにがしという御慶かな

間村 俊一

遠来の客と三日の酒を酌む

内藤 隼人

● 忌

〔特選〕 三回忌形見分けとてちゃんちゃんこ

石原 新

三回忌の法要が終わり、皆が帰ったあとの兄弟姉妹である。形見分けが何事もなく済んだかどうかは、推し量りようもないが、もら

〈特選〉

振り売りの暗算早し冬菜買う

中村 真一

●自由題

〈佳作〉

ったものの一つとして、ここにちゃんちゃん
こを取り上げたので成功した。

河合富美枝

寒鴉禁忌の多い峡の村

鳴沢 恵

冬紅葉また迫り来し娘の忌

山口 信子

〈佳作〉

振り売りというと、天秤棒を担ってやって
来たものだが、この頃は車が多くなった。い
ずれにしても計算器などという、まだるっこ
いものは使わない。暗算で即座に済ませてし
まう。慣れたものだが正確なものだ。

山内 桃児

宅配便また柔らかき餅届く

浜口 佳春

城の坂日の温もりに腰下ろす

浦田 ちゑ



浄土誌上句会のお知らせ

兼題
季節ではありませぬ

雅楽 時刻表 自由題

誌上句会〈編集部選〉

■遠

月山の遠嶺はるかに木守柿
みちのくに春遠からし室の花
明日でも遠く彼方に行く我が身
目玉から眉毛の遠き福笑い
福神に縁遠けれどお正月
近くても遠回りして初詣
正月や遠路はるばる来た帽子
遠い遠い錨が濡れて冬夕焼
おもちゃ屋の遠慮がちな注連飾り
遠めがね遠く逆さに初景色

河合富美枝
佐藤雅子
飯島英徳
工藤 掉
小林苑を
山内桃児
村松芳郎
濱野具円
鈴木純子
一橋哲平

締切・二〇一一年二月二十日

発表・『浄土』二〇一一年五月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■忌

忌といふ文字が取り付く鎌鼬
元旦や寺に貼り出す忌日表
歳時記の忌日一覽寒に入る
寒鰯や今日も明日も誰かの忌
寒鰯禁忌の多い峡の村
屠蘇ののち父の七回忌の話
小晦日忌中の札を外す人
蒟蒻に味滲みてくるあいつの忌

■自由題

鳥海山擡げて海は冬日和
色変へぬ松凜として鳥放つ
水門の今日は開いて都鳥
銭湯に高き窓あり大旦
はんべんの性善説をばくと嘯む
冬日向白き倉庫の眠りたる
釘抜きのような地下足袋寒に入る
鳴く気かとにらめば嚙う寒鴉
松過ぎや泡の残りし哺乳瓶
少女らは気の済むようにふぶきけり
七草やすずなで止まる大男
冬林檎熱持つ頬に触れにけり

佐藤雅子
柄本圭子
町村亮一
多村 栄
鳴沢 恵
峠 正臣
宮崎 透
紺野 敬

佐藤雅子
河合富美枝
一橋哲平
斉田 仁
福島赤土
井口吾郎
長谷川裕
内藤華人
工藤 掉
濱野具円
鈴木純子
鈴木真理子

さっちゃんね

かまちよろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



寝ころべは月のウサギも横になる 岱潤

自坊の揭示板に法然上人のお言葉として、今月は『一丈の堀を越えんと思はん人は、一丈五尺を超えんとはげむべし』を掲示した。新年早々勢いがあつていいかなと思つてのことだったが、寺庭から「このお言葉つて、いつもの法然上人らしくないわよね」と言われ、確かにと思ひ、続く言葉を見てみると「往生を期せん人は、決定の信をとりてあひはげむべきなり」とあつた。そうなんだ、このお言葉は、もつともつと頑張れという意味ではなく、一丈五尺も阿弥陀様は超えられると保証してくれているのだから、安心してはげ

みなさいだったのだ。全くの誤解をしていたことに気付き、新年早々反省した。

元來仏教は単純な努力主義は説かないはずだ。精進という言葉はあるが、正式には頭に正の字をつけて「正精進」と使うべき言葉で、がむしやんな努力は是としないのが仏教である。今年は卯年だからつい思い出してしまうが、「ウサギと亀」の話もインドでは全く違う解釈をするとい前ひろさちや師が教えてくれた。インドでは亀の様な人にはなつてはいけないと説くという。それは競争していた相手が途中で寝ていたのになぜ起こしてあげないのかということだ。人としての生き方、勝てばいいのではないことを教

えてくれた。

今年はウサギの昼寝よろしく、少しア
クセルから足を放し、のんびりとするの
が、卯年の生き方かもしれないと思うの
は私だけだろうか。

(長)

(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤

齋藤豐光道

佐山哲郎

村田洋一

淨土

七十七卷二、三月号 頒価六百四

年會費六千四

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷
平成二十三年一月二十日

発行 平成二十三年二月一日

佐藤良純

編集人——大室了皓

印刷所——株式会社
シーティイーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

發行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

振替〇一八〇・八・八二八七

1000

雑誌「浄土」
特別、維持、賛助会員の方々

飯田英雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・順行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光寺)
臚 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

知恩院縁起

専修念仏の御教えを確信し、浄土宗を開宗した法然上人は比叡山を下り、やがて吉水の禅房、現在の知恩院御影堂の近くに移り住みました。そして、訪れる人を誰でも迎え入れ、念仏の教えを説くという生活を送りました。建暦2年（1212）、80歳にて入寂。門弟たちは房の傍らに上人の墳

墓をつくりましたが、その15年後、叡山の僧兵により墳墓が破却されそうになったため、弟子たちは亡骸を西山粟生野に移し、茶毘にふします。その後、文暦元年（1234）、源智上人は、荒れるがままになっていた吉水の墓所を修理し遺骨を納め、仏殿、御影堂、総門を建て、知恩院大谷寺と号し、法然上人を開山第一世と仰ぐようになりました。知恩院の名は、遺弟たちが上人報恩のために行った知恩講に由来します。



法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう 其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう 600円(税別)



月刊『浄土』 バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版 1,600円(税別)

※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より



「法然上人絵伝絵葉書」 (8枚セット)500円(税別)

